

豊橋のナガバノイシモチソウ自生地

<概要>

面積 2,500 m²

日本産ナガバノイシモチソウ(長葉石持草)は、貧栄養湿地に生育するモウセンゴケ科の1年生食虫植物で、花卉は5枚、夏季に白色、赤色などの花を付ける。葉には多数の腺毛せんもうがあり、粘液を分泌して補虫する。日本産の種は、東南アジアに生育する近縁種が多年生であるため、形態および遺伝的に異なることが判明した。さらに、日本産の赤花と白花も別種であり、ナガバノイシモチソウ(赤花)、シロバナナガバノイシモチソウに分類された植物である。

シロバナナガバノイシモチソウは、愛知県のほか、栃木県、茨城県、千葉県及び宮崎県等に分布するが、何れも限られた範囲でのみ生育している。県内では、武豊町の県指定天然記念物「壺町田湿地植物群落」いっちょうだに白花種が自生している。それに対して赤花のナガバノイシモチソウは、愛知県のみ^にに生育している。現在「豊明のナガバノイシモチソウ」が県指定、豊橋市佐藤町の「ナガバノイシモチソウ自生地」が市指定となっており、自生が確認されているのはこの2か所のみである。

豊橋市内でのナガバノイシモチソウは、かつて、^{にしみゆきちょう}西幸町の清水池、浜池と佐藤町の長三池ちょうさんいけの周辺に自生が認められたが、西幸町の2か所は開発等で滅失し、現在では佐藤町地内の市指定地のみが自生地となっている。

佐藤町の自生地は、1971年に発見されたもので、1980年代には周辺の区画整理事業等の影響で、一時は絶滅も危惧される状況となっていた。その後1993年に豊橋市の天然記念物に指定された。保全活動が行われていたがクロマツやコナラなどの樹木が茂り、2011年には自生数が約300個体まで減少した。2013年から日照をさえぎっていた樹木の大規模伐採や、除草作業による環境整備事業等が開始され、現状においては、ナガバノイシモチソウは約16,000個体まで回復し、その他様々な湿性植物の自生が認められている。

当該地は、現在2カ所しかないナガバノイシモチソウの自生地であること、また、豊橋市教育委員会の継続的な保全活動により、安定的な世代交代が行われていることから、県指定天然記念物として十分な要件を備えているといえる。また、観察会などの公開活動も積極的に行われており、文化財としての指定により、県民の一層の自然保護意識の向上に資することが期待される。



豊橋のナガバノイシモチソ
ウ自生地（西から）



豊橋のナガバノイシモチ
ソウ自生地（東から）



ナガバノイシモチソ
ウ開花状況

（画像はすべて豊橋市教育委員会提供）